

宇野浩二「枯木のある風景」論

—— 絵画の構図との関連 ——

増 田 周 子

一

宇野浩二は、昭和元年に神経衰弱を病み、入退院をくり返した。芥川龍之介は遺稿「或阿呆の一生」(「改造」昭和二年十月一日)の四十九「悖」で、その宇野浩二について、次のように描いている。

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、——軽快な仮面の下にある孤独の一人一倍身にしみてわかる為だった。彼はこの友だちの発狂した後、二三次この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼につかれてゐるんだね。世紀末の悪鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりした。が、それから二三日後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたといふことだった。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに

贈ったテラコッタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した「検察官」の作者の半身像だった。彼はゴオリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感じずにはゐられなかった。

宇野浩二は、昭和二年六月に斎藤茂吉の紹介で小峰病院に入院した。見舞いに行った芥川龍之介が、昭和二年七月に自殺した。宇野浩二も、昭和四年三月初めには一時重体となった。しかし、四月末には奇跡的に快癒し、昭和五年・六年・七年の三カ年間は、専ら静養につとめたのである。その間、広津和郎や谷崎精二など、ごく親しい知人とのわずかな交際があっただけで、作家としての創作活動は、ほぼ停止状態にあった。そうした宇野浩二が、昭和八年一月に、小出樞重の描いた「枯木のある風景」という絵のタイトルをそのままつけた短篇小説を「改造」に発表し、堂々たる文壇復帰を果たしたのである。この「枯木のある風景」は、「枯野の夢」などと一緒に、単行本『枯木のある風景』(昭和九年三月五日発行、白水社)に収録された。その巻末にある「跋(創作餘談)」

で、宇野浩二は、「枯木のある風景」の執筆動機、および進捗状態を次のように述べている。長い引用になるが、「枯木のある風景」に関する部分の全てをあげておく。

『枯木のある風景』は、友人鍋井克之から二三年前、「小出檐重が死ぬ二二年前から画技がますます冴えて来ると共に肉体が次第に衰へて来、仕舞には目がしよぼしよぼして老人のやうな目つきになり、嘗て一種の能弁だったのが吃のやうに物がうまく云へなくなり、それを漫画のやうに云ふと、頭ばかりが益々大きくなり、それを支へる肉体が次第に瘠せ細った挙句、すーつと死んでしまった、」といふ意味の言葉を聞いただけで、当の小出檐重には一二度会った切り、その住居を訪問した事は一度もなく、画家の生活も苦勞も少しも知らなかつたが、それを成るべく写實的に書かうと思つて、それをいよいよ書かうと思ひ立つたのは六月上旬からで、初めの十六枚ぐらゐ書いたのを書いたり書き直したりするうちに三ヶ月ほど立つた。併し、九夏三伏の苦熱と戦ひながら、原稿紙を汗でよごさぬように、始終手首に天花粉をつけながら、完成するかしないか見当のつかぬ小説を書きつづけるのが何時となく楽しみになつた。私が完成する楽しみより、それを作る過程の楽しさを知つたのは、この『枯木のある風景』を書きつづけた時からである。然し、餘りはかばかしく行かないので、一度投げ出して、『枯野の夢』を二枚ばかり書き出した事があつたが、これを後

廻しにしては、折角の今までの苦勞が無駄になるし、これからの創作の爲めにも、また先きの長い修業の爲めにも、と思つて、『枯野の夢』の書出の二枚を一時筐底にしまひ、書き出してから三ヶ月ほど後、やつとあの書出を構想したのである。この作は、私に満足とまで行かない作品ではあるが、よい修業になつた事と、『小出檐重画集』と二冊の随筆集を参考にしたほかは殆ど全部空想で構想した事とで、私に愛着のある作品である。

また、宇野浩二は後年になつても「小出檐重」（「美術手帖」昭和二十四年二月一日）で、次のように回想している。

この小説を書きはじめたのは、昭和七年の六月のはじめ頃であるが、小出の晩年のことを、（若い日の事をも入れて、）なんとかして、書きたい、とおもつたのは、小出がなくなつてから間もない頃であつた。

それで、私は、まづ、小出の随筆集を、すみからすみまで、読んで、「これ」とおもふところに、シルシを、つけた。それから、小出の死後に、いくつかの雑誌に、出た、小出について書かれた評論を、よんで、切りぬいておいて、それを、参考にした。

「跋（創作餘談）」や「小出檐重」らによれば、宇野浩二が「枯木のある風景」を書くのに「参考」にしたのは、『小出檐重画集』（昭和七年五月、春鳥会）と「二冊の随筆集」、「小出について書かれた評論」である。では、その「二冊の随筆集」とは何を指しているのだろうか。油絵画家小出檐重は、昭

和六年二月十三日、芦屋で、満四十三歳の短い生涯を閉じた。小出楢重は、その生前に、次の四冊の書物を刊行している。

- (1) 『楢重雑筆』（昭和二年一月、中央美術社）
- (2) 『自由画に就ての心がまへ』（昭和四年三月、濱寺双葉幼稚園）

- (3) 『めでたき風景』（昭和五年五月、創元社）
- (4) 『油絵新技法』（昭和五年十月、アトリエ社）

いずれも小出楢重自装、題字も小出楢重のレタリング、それに自筆挿画入りの極めて美しく、優雅に凝った瀟洒な書物である。この四冊のうち「枯木のある風景」に直接関係してくる随筆集は、(1)と(3)、すなわち『楢重雑筆』と『めでたき風景』の二冊の随筆集であろう。では、宇野浩二が「参考」にした「小出について書かれた評論」とは一体なにをさすか。渋川驍の『宇野浩二論』（昭和四十九年八月三十日発行、中央公論社）に、日本近代文学館が所蔵している「宇野浩二日記」（日記は刊行されていない）の一部分が引用されている。それによると、昭和七年五月三十日付の「宇野浩二日記」に、「小出君の材料を覚える為に、『みづゑ』の小出追悼号をしらべる」と記されているという。美術雑誌「みづゑ」昭和六年四月発行は、「小出楢重追悼」（第三一四号）を特集している。この追悼号には、次の人々が小出楢重について語っている。

小出楢重君の追憶

鍋井 克之

哭小出君

黒田重三郎

小出君「自画像」の三本筋

田辺信太郎

小出君を悼む

木村 荘八

宇野浩二が「参考」にしたという「小出について書かれた評論」というのは、これら「みづゑ」に掲載された追悼文などのことであろう。

小説「枯木のある風景」の作品世界に、宇野浩二が執筆に「参考」とした『小出楢重画集』・『楢重雑筆』・『めでたき風景』・「みづゑ」小出楢重追悼号がどのように関係してくるのか、小説と素材の関連について、追求してみたいと思う。

二

「枯木のある風景」に登場する人物は、島木新吉、古泉圭造、八田彌作、入井市造の四人である。四人はともに画家であり、それぞれにモデルが存在する。島木新吉は鍋井克之、古泉圭造は小出楢重、八田彌作は黒田重三郎、入井市造は国枝完治である。六年前、島木新吉と古泉圭造は浪華洋画研究所（大正十三年四月に創設された信濃橋洋画研究所）を創設した。二人だけでは手がたらないので、彼等の共通の友だちで、同じ大阪に在住する八田彌作・入井市造に講師を頼み、以来今日までつづいている。

紀元節の朝、珍しい大雪が積ったので、島木新吉が奈良へ写生に行くところから小説は始まる。島木新吉と古泉圭造は、同じ大阪出身で、白馬会洋画研究所を経て、同じ美術学校へ入学した同級生である。島木新吉が風景画を得意とし、古泉

圭造が人物画を得意とする。島木新吉は古泉圭造の人と芸術を認め、また、古泉圭造も島木新吉の人と芸術を認めていた。

島木新吉は奈良の高畠の雪景の下書きをしながら、古泉圭造のことを思いつづけた。「枯木のある風景」は、小出楯重をモデルにしながら、直接それを描くのではなく、鍋井克之をモデルにした島木新吉の回想の中に現われるだけである。そして、島木新吉の回想の特徴は、常に島木新吉が古泉圭造を訪ねることにある。島木新吉が古泉圭造を訪ねる度に、「只者でない印象」を受け、作品世界が進行していくという構成になっている。

作品中島木新吉は、古泉圭造を四回訪問する。最初の訪問は、美術学校を卒業して大阪の生家に帰った時である。「無口な偏癡者」である古泉を訪ねてもおもしろくないであろうと思っていた島木が、友人に誘われ、訪問する。その時、島木は「古泉の妙に落ち着いた物のいひぶり」から、これは只者でないという印象を受けた。それは漠然としたものであった。そして、訪問のたびに、「只者でない」古泉の特異な才能を感じるのである。四回の訪問のうち、最も重要なのは三回目である。この時の訪問は、「最初から最後まで島木が受身の形」になった。島木は二つの出来事に驚嘆する。一つは、「版で刷ったやうな十点」以上のフランス人形の油絵を妻から無理矢理描かされながらも、それが「一点の駄作」もないことである。もう一つは、「かなり大きな絵の下書きらしい二つの素描で、一つは古泉の得意な人物画で、他は古泉にはめづら

しい風景画」であった。その二つは、「裸婦写生図」と「枯木のある風景」の素描である。古泉は、「今までの、写実一点張り」は、これで（再び『裸婦写生図』を指さして）「当分打ち切りにして、これからは、芭蕉風に、写実と空想の混合酒を試みてみようと思ふんや。題して『枯木のある風景』といふのはどうや」という。古泉の「只者」でない才能が具体的に示されるのである。島木が訪問すること、古泉の画業に対するひたむきな熱意とその特異で、豊穡な才能が明らかにされていく。

小説「枯木のある風景」は、島木新吉の古泉圭造訪問という過去の回想から、現在に立ちかえる。島木新吉の奈良滞在中、島木とは連絡なく、別の宿に八田弥作と入井市造とがきている。この二人は、夕食後、たがいに古泉圭造の画業を品評するのである。ところが、古泉圭造の死の知らせをうけて、奈良駅にかけつけると、その待合室におもいがけなく、島木を発見した。三人が古泉の家に着くと、故人の遺骸の安置された部屋には、絶筆の一つである三十号の油絵「枯木のある風景」と未完成のまま残された、三十号の油画の下書きの「裸婦写生図」がおかれていた。島木はその二つの絵を見くらべ、見つめた。そして、「枯木のある風景」は、「島木は、しかし、『枯木のある風景』にも異常な敬意をはらったが、『裸婦写生図』の方により多くの敬意をはらった」と結ばれるのである。なぜ、島木は「裸婦写生図」の方に「より多くの敬意をはらったのであろうか。『枯木のある風景』は、島木の四回目の訪

問、それは古泉の死でもって終るのである。

三

正宗白鳥は「宇野浩二論」（『中央公論』昭和九年三月一日）のなかで、「枯木のある風景」について、次のような、かなり手きびしい批評を行った。

「枯木のある風景」は、芸術家を取扱つてゐる小説だから、作者は、意識的に、或は無意識的に、作中人物に託して自分の芸術観を述べてゐると見て差支へあるまい。「写真と空想のコクテール」説なら、何の奇もなく、それを「芭蕉風に」試みると考へたところに、作者の新しい意図があるのであらう。この作者も、他の多くの日本作家と同様に芭蕉の精神に復帰して、そこに文学的安立の地を見つけたのであらうか。「枯木のある風景」にしろ、「枯野の夢」にしろ、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」とか「枯枝に鳥の留りける秋の暮」とかいふ芭蕉の俳諧の精神と風趣を腹に捉えて、現代の写真をなし、或は現代らしい空想を発揮したのであらう。しかし、この作者は、本道の見当はついたにしても、まだ実際の作品に於て、それを生かし、それを完成させてはゐない。それは今後の作者の努力に待たなければならぬ。

そして、正宗白鳥はさらに続けて、次のように批判する。「枯木のある風景」は二度読んで見たが、古泉といふ

画家なんかから受ける印象は極めて稀薄だ。「鬼気人にせまる」といふ作者自身の評語は、空虚な文字に過ぎないので、鬼気や妖気の影も差してやしない。

正宗白鳥は「画家なんかから受ける印象は極めて稀薄だ」と、島本新吉、八田彌作、入井市造ら三人の回想、会話によつて、とらえられた古泉圭造を主軸に、「枯木のある風景」を読んだのである。たしかに、さきの「跋（創作餘談）」にあるように、宇野浩二が「枯木のある風景」を執筆する動機になつたのは友人鍋井克之から、「小出楯重が死ぬ一二年前から画技がますます冴えて来ると共に肉体が次第に衰へて」来たということを聞いたからであらう。「枯木のある風景」においても、「漫画」のようないい方をする、「頭ばかりが大きくなつて、それを支へる肉体が、頭が大きくなればなるほど、終にしだいしだいに瘠せ細つて行つて、終に大きな頭と大きな手だけが残つて、その肉体がスーツと幽霊のやうに消えてしまつた」と死んだ古泉圭造について描かれている。だが、宇野浩二は、「我觀の文学」（『文芸』昭和十四年七月一日）のなかで、「あの小説の内幕を述べると、あれは、手を附ける二三年前から腹案を持つてゐて、最初は小出楯重を正面から書くつもりであつたのであるが、何分小出には、一度か二度しか、それも、ちよつとしか、会つた事がないので、それは到底出来ないうことと諦めて」いたという。宇野浩二は「枯木のある風景」において「小出楯重を正面」から描くことを最初から放棄してしたのである。「手を附ける二三年前から腹案」を持

つていたのは、何分にも「一度か二度しか」会った事のない、小出檐重に関してではなかった。宇野浩二が小出檐重の人間性や人柄に興味を覚えたのではなく、彼の描く芸術、絵画そのものに何よりも好奇の目を向けていたのであろう。つまり、「枯木のある風景」においては、古泉圭造という人間像よりも、古泉圭造の表現したところの絵画そのものの即ち芸術意識を描くことが、小説一編の主題であった。

「枯木のある風景」に登場する島木新吉らの人物にモデルがあるように、この小説のなかで描かれる絵画についても、実在の絵がある。ここでは古泉圭造の絵に限定して、小出檐重の絵をあげておく。小説に出て来る順に、それをあげてみたい。出典については、『生誕100年小出檐重展』図録（一九八七年発行、「生誕100年小出檐重展」実行委員会）を参照した。

① 奈良の風景

小出檐重「奈良風景」大正五年十月、第十四回関西美術会展に出品。

② 雪景

小出檐重「雪」昭和二年九月四日～十月四日、第十四回二科展（東京府美術館）に出品。

③ フランス人形

小出檐重「フランス人形」

④ 裸婦写生図 下書き

小出檐重「アトリエ風景」素描、昭和六年九月三日～十月四日、第十八回二科展（東京府美術館）に出品。

⑤ 『夏の郊外』

小出檐重「六月の郊外風景」昭和五年九月四日～十月四日、第十七回二科展（東京府美術館）に出品。

⑥ 枯木のある風景

小出檐重「枯木のある風景」昭和六年九月三日～十月四日、第十八回二科展（東京府美術館）に出品。

⑦ 出世作「一家族」G賞

小出檐重「Nの家族」大正八年九月十日～三十日、第六回二科展（上野竹之台陳列館）に、広津和郎、鍋井克之らのすすめで出品。樗牛賞を受賞。

⑧ ある娘の像 K賞

小出檐重「少女於梅之像」大正九年九月一日～二十九日、第七回二科展（上野竹之台陳列館）に出品。二科賞を受賞。

⑨ 雪の風景

小出檐重「雪」昭和二年九月四日～十月四日、第十四回二科展（東京府美術館）に出品。

⑩ 郊外の風景

小出檐重「六月の郊外風景」昭和五年九月四日～十月四日、第十七回二科展（東京府美術館）に出品。

⑪ 卓上の蔬菜

小出檐重「卓上蔬菜」昭和二年九月四日～十月四日、第十四回二科展（東京府美術館）に出品。

⑫ 卓上の牡丹

小出檐重「牡丹」昭和四年九月三日～十月四日、第十
六回二科展（東京府美術館）に出品。

宇野浩二はこれらの小出檐重の絵画を「枯木のある風景」
において、島木新吉、八田弥作、入井市造の登場人物を借り
て、存分に論じつくす。宇野浩二が「枯木のある風景」を書
くのに『小出檐重画集』を「参考」にしたことは、さきに引
用し、紹介した「跋（創作餘談）」にある通りである。しか
し、ここで注意したいのは、これらの十二点のすべての絵が
『小出檐重画集』に掲載されているのではないことである。『小
出檐重画集』に出てくるのは、②⑨「雪」、⑥「枯木のある風
景」、⑦「Nの家族」、⑧「少女於梅の像」、⑪「卓上蔬菜」、
⑫「牡丹」である。宇野浩二は『小出檐重画集』が刊行され
たのを見て、そこではじめて小出檐重の油絵に興味を覚えた
のではない。また『小出檐重画集』一冊だけを手元において、
「枯木のある風景」を構想し、執筆したのではない。宇野浩二
は、「小出檐重」（前出）のなかで、「小出とは、ふしぎな縁の
やうなもので、その晩年ちかくに、手紙の『やりとり』はし
たけれど、したしく、つきあったことがない。私は、小出を、
一ど、見かけたことがあるだけであり、小出に逢ったのは、
ただ一度である」と述べている。小出檐重とは「ただ一度」
逢っただけの関係であった。宇野浩二が小出檐重を知ったの
は、小出檐重が鍋井克之の友人であったからであろう。宇野
浩二が「はじめて小出に逢った」のも、「大正八年の秋」に「鍋
井の家」であった。宇野浩二の最初の童話集『海の夢山の夢』

（大正九年一月十八日発行、聚英閣）の装幀、挿絵を鍋井克之
を仲介して手掛けてもらう。

興味深いことは、宇野浩二が昭和三年という時期に、小出
檐重の油絵を実際に購入していることである。宇野浩二は「回
想の美術」（『新美術』昭和十八年八月一日）のなかで、次の
ように語っている。

その時の二科会に、小出は、たしか、『周秋蘭立像』と
いう支那美人をかけた百号に近い大作と、裸体画を二つ
出していた。私は、その時の小出の絵を見て、二つの裸
体画の一つの方がほしくなった。（私の家は美術館の近く
にあるので、そこで開かれる大抵の展覧会を見に行くが、
陳列されている絵は感心することはしばしばあっても、
それは容易に買えないからでもあるが、ほしいと思うこ
とは滅多にないので、これは稀であった。）それで、私
は、いろいろと思索した末に、まわりくどい言葉で、月
賦でも……と相談と頼みの手紙を小出に書いた。

小出檐重の「周秋蘭立像」が出品されたのは、昭和三年九
月三日から十月四日まで、東京府美術館で開催された第十五
回二科展である。この時、小出檐重は、「周秋蘭立像」のほ
か、「横たわる裸女A」と「横たわる裸女B」の二つの裸体画
をも出品した。渋川曉の『宇野浩二論』（前出）によると、日
本近代文学館に小出檐重の宇野浩二に宛てた書簡が所蔵され
ているという。それによると、昭和三年十月十七日付と同年
十二月二十四日付の宇野浩二宛の小出檐重書簡には、いずれ

も五十円受け取ったことが記載されていて、昭和五年八月四日付の書簡には「今日突然のお手紙に全く驚かされました。それに五十円を送ってもらひ、これも頗る恐縮です。これは折角の御厚意だからもらつておきます。それにしても、もう相当にもらつたのですから、あとはもう決して送つて下さる必要はありませんから、そのつもりでこれで打ち切つて下さい」とあるという。宇野浩二が小出楯重の裸体画を分割で購入したのは、先の図録によると「横たわる裸女A」である。

宇野浩二は、小出楯重の絵画を何としても手に入れたと思ったようである。宇野浩二のご遺族にあたる宇野和夫氏にこの絵について尋ねたところ、つい最近まで自宅で保存していたのだが、現在は芦屋市立美術館が所蔵しているとのことであった。昭和三年から昭和五年にかけて、宇野浩二は精神異常から回復していても、まだ自宅療養のため出費が多いときであり、ほとんど文筆活動を停止していて、文筆からの収入が減少していた時期であった。経済的に不自由しているにもかかわらず、小出楯重の「横たわる裸女A」を購入しているところを見ると、いかに宇野浩二が小出楯重の絵に執着していたか、宇野浩二が小出楯重の絵に強い関心、愛着をもっていたかわかる。偶然、宇野浩二が『小出楯重画集』を入手して、小出楯重の画業に関心を寄せたといったような代物ではない。宇野浩二は、昭和二年から六年の間、大患から「枯木のある風景」執筆による文壇復帰を果す間、ちょうどその頃、東京上野桜木町に住んでいたということもあって、上

野の展覧会には気晴らしによく出かけて行ったのであろう。展覧会で、小出楯重の作品を目の当たりにし、新鮮な感動を覚えたのである。小出楯重の画技がますます冴えわたり、その才能が著しく発揮されていくのに驚嘆したのであった。

武田麟太郎は、広津和郎との対談「散文精神」（『文芸』昭和十四年六月一日）で、次のように発言した。

あの作品で小出楯重が、写・実・と・象・徴・と・の・カ・ク・テ・ル・、そんなものでゆかうといふところがありますね。あの言葉は何んでもないやうだけれど、つまり、それは言葉としては平凡なひびきしか持つてゐないし、生じつかの人でも、言葉の洒落たあやとして、使へるか使へないか、宇野さんが本当に自分でさう感じた、そこまで来た作品だと、僕は思ふのです。「枯木のある風景」がさういふ意味で一転機であり、名作である、——と僕はさう思つてゐますけれども、……。だからあの小説には、小出さんのあの絵を原色版で挿入すべきですがね。といふことは、宇野さんはあの絵をみんなが知つてゐるといふことを、あの絵の良さを感じ攝つてゐる、といふことを——前提にしてあの小説を書いてゐられるやうですね。

この武田麟太郎の発言に対して、宇野浩二は、「我觀の文学」（前出）で「武田麟太郎ともあらう人が、以ての外の考へ」である。「鳥羽憎正の鳥獸戯画とかダ・ギンチの『モナ・リザ』のやうな世に知られた名画であれば、さういふ事も云へるであらうが、それにしても、小説に絵画や彫刻が出る場合、そ

の題名だけで、『あの絵をみんなが知ってる』などと考へて、小説を書く作者があらうか。あれば大間拔^{まぬけ}である」という。武田麟太郎は錯覚したのであらう。宇野浩二の小説「枯木のある風景」によって、はじめて小出檐重の絵「枯木のある風景」が話題になり、「みんなが知ってる」ようになったのである。宇野浩二は「あの絵は、小出の生きてゐるうちに殆んど誰も知らなくて、大抵遺作展覧会で初めて見たのである。私（たち）は、これまで（生前）は、写實的過ぎる絵ばかり書いてゐた小出が、あのやうな、写實的であつて、然も写實的でない絵を書き残してゐたことに、驚異の目を見張つたのであつた」とも述べている。宇野浩二のその「驚異の目を見張つた」衝撃が、「枯木のある風景」執筆のモチーフであつた。

さて、武田麟太郎は、小出檐重の「あの絵」、すなわち「枯木のある風景」の絵を「原色版で挿入すべき」であると主張した。小説「枯木のある風景」を理解・鑑賞する上で、それは必ずしも必要ではないであらう。ただ、宇野浩二が小出檐重の絵画のどこに驚嘆したのか、「枯木のある風景」執筆の動機を探る上において、実在した小出檐重の絵画をここにあげておくことも無駄ではないであらう。「枯木のある風景」には、さきに述べたように、実際に存在した小出檐重の絵画十二点を想定して作品は描かれている。それらすべてをここで取りあげる必要もないであらう。小説「枯木のある風景」の中軸をなしている小出檐重の絵画、すなわち、⑩「六月の郊

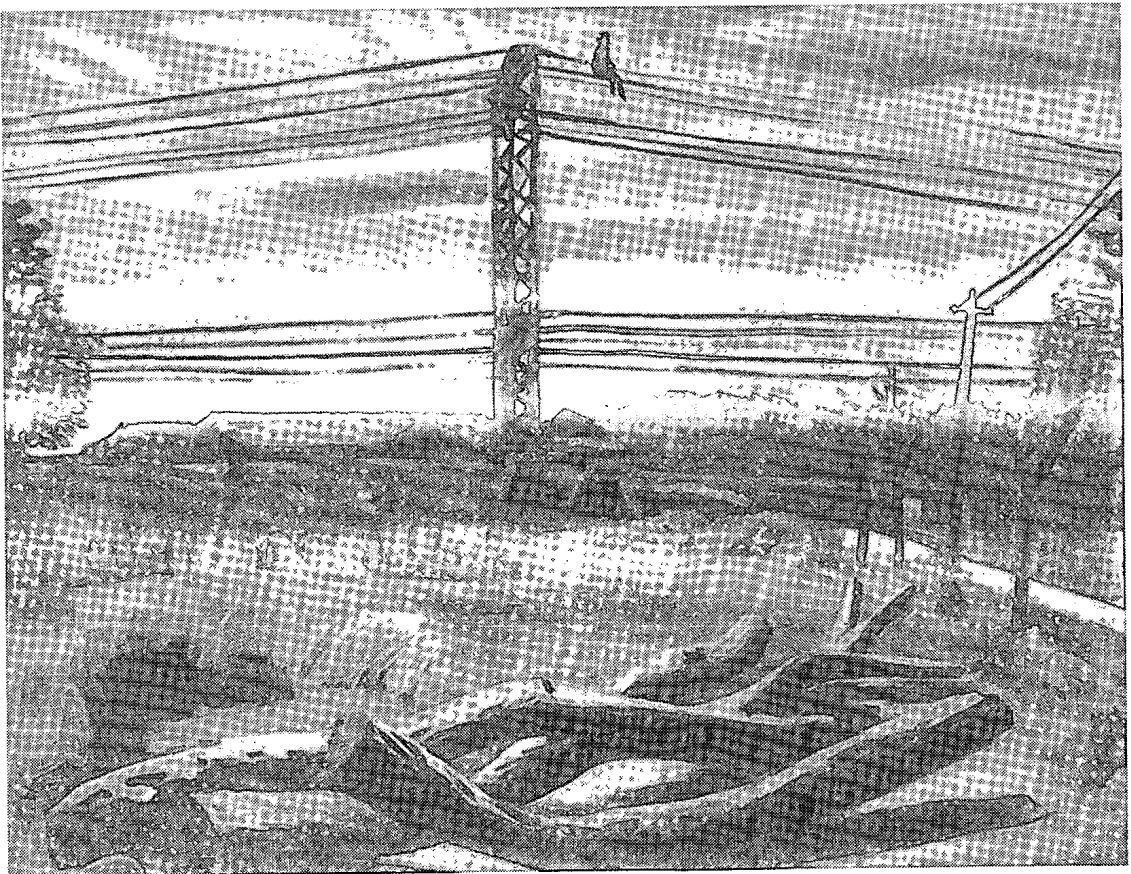
外風景」、⑥「枯木のある風景」、④「裸婦写生図」の三点を、「原色版」というわけにはいかないが、とりあえず、次に掲げることにする。

④「裸婦写生図」





⑩「六月の郊外風景」



⑥「枯木のある風景」

小説「枯木のある風景」では、⑩の「六月の郊外風景」は、「郊外の風景」という画題で出ていて、八田弥作がこの絵の構図を「画面の下半分が夏の野原で、近景にカンナの花壇があつて、左手に叢があつて、その向かうに森のはづれが見えて、右手に西洋館の一部がちよつと覗いてゐて、野原の向かうのちやうど地平になるときに、バラック建ての平家と、それと同じ高さに見える遠い丘があつて、その家の前に電信柱が二本立つてゐて、下の道があることを現してあつて、画面の上三分の一に夏らしい紅味がかった空が見える……」と説明する。

⑥の「枯木のある風景」については、島木新吉が「こつちの風景は、何や見おぼえのあるやうな景色やな」というと、古泉圭造が、前に書いた「夏の郊外」の風景を、「今は夏と違って、花とか叢とかいふ雑物はあれへんし、もしあつたかて、此方が冬の神さんになつて、いらん雑物は此方で勝手に枯らしてしても、書いたらと思てんね……」「今度の風景は、その雑物をみんな取つて、こつちの絵エ『裸婦写生図』を指さしながら」の裸婦の横たはつてゐる辺に、枯木の丸太を四五本横倒しにおいたろと思てんね。それだけで、後はまだ思案ちゆうや。……今までの、写真一点張りは、これで（再び『裸婦写生図』を指さして）当分打ち切りにして、これからは、芭蕉風に、写真と空想の混合酒を試みてみよと思ふんや。題して『枯木のある風景』といふのはどうや」と弁じるのである。

④の「裸婦写生図」については「裸婦と人物（自画像）」と

を一緒に取り入れてゐる、——くはしくいふと、裸婦を前景（画面の下方）に横たはらせ、背景の中央にそれを写生する横むきの画家（自画像）と、その画家と同じ大ききくらゐの画架を対立させ、その背景の左側と右側に煙突のついた暖炉半分と壁掛半分とを対立させ、なほ前景の裸婦の下に支那寝台の上部をのぞかせてゐる」とくわしく描写されている。

宇野浩二は、小出檐重の死後、昭和六年九月三日から十月四日までに開催された第十八回二科美術展に、小出檐重の遺作、油彩二十四点、素描七点、ガラス絵五点が特別陳列され、そのなかの油絵「枯木のある風景」、素描「裸婦写生図」を見て、感嘆したのである。その前年の九月四日から十月四日にかけて開かれた第十七回二科美術展に出品された小出檐重の「六月の郊外風景」を思い出し、それと著しく変貌していたからである。写實的過ぎる絵ばかり描いていた小出檐重が、「枯木のある風景」では、高圧線の鉄骨の上に黒い「鳥」のような物体を描くのである。作中の古泉圭造は「芭蕉風に、写真と空想の混合酒を試みてみよと思ふんや」というが、それは「枯枝に鳥のとまりけり秋の暮」のような芭蕉の句の世界を描いたのではない。宇野浩二は八田弥作に「それが、人間やないか。僕が『鬼気人にせまる』感じがした」といわしめていたのである。当時、宇野浩二以外に、小出檐重の「枯木のある風景」に注目し、このように批評した人はいなかった。児島喜久雄の「二科展評(二)——小出檐重君の芸術——」（『東京朝日新聞』昭和六年九月九日）には、「M君の母の像」「少女お梅

の像」「ソムムラールの宿」「窓」といった作品は取りあげられているが、油絵「枯木のある風景」、あるいは素描「裸婦写生図」などは、その題名さえもあげられることなく、全く等閑視されている。

宇野浩二は、小出楢重の芸術が写真から抽象風に変化したことに、衝撃をうけたことだけではなかった。なによりも、宇野浩二が新鮮な感動を覚えたのは、「枯木のある風景」の「大胆不敵」な「構図」である。しかも、小出楢重の絵を見れば、説明するまでもなく写真に描いた「六月の郊外風景」と同じ「構図」の上に、それを描いているのである。さらに未完成で終わった素描「裸婦写生図」も、裸婦を描く自分をカンバスの中に登場させ、枯木の丸太を女の裸体に、高圧線の鉄柱を画架に、左右端の木を煙突と壁掛に見立てられる。「裸婦写生図」も、「六月の郊外風景」や「枯木のある風景」の「構図」と同じなのである。小出楢重は、わずか一・二年の間に、同じ「構図」をもって、「六月の郊外風景」、「枯木のある風景」、「裸婦写生図」と、三様の世界を追求しようとしたのである。「枯木のある風景」で満足することなく、さらなる精進と発展を志した小出楢重の芸術魂に、宇野浩二は敬意をはらった。だからこそ、小説「枯木のある風景」は、「島木は、しかし、『枯木のある風景』にも異常な敬意をはらったが、『裸婦写生図』の方により多くの敬意をはらった」と結ばれるのである。この「裸婦写生図」とは、原題は「アトリエ風景」という^{21.5}×16.4 cmの素描であったのだが、「枯木のある風景」では、故意に

「枯木のある風景」と同じ三十号の絵にし、「郊外の風景」「枯木のある風景」らとの関連を際立たせている点は、実に興味深い。

宇野浩二は、さきに引用した「跋（創作餘談）」のなかで、「枯木のある風景」の「初めの十六枚ぐらゐ書いたのを書いて書き直したりするうちに三ヶ月ほど立つた」と書いている。「枯木のある風景」の書き出しの十五六枚には四苦八苦したようだ。「我觀の文学」（前出）でも、その難渋ぶりを具体的に、「あの五十枚の小説の最初の十五六枚を、三箇月程の間、書き直し書き潰しして、五百枚ぐらゐ費した」と回想している。はじめの十五六枚部分の「島木が数年前に書いたことのある高畠の風景で、いま島木が目の前に見出した風景は、それらの点景がことごとく深い雪におほはれてゐるために、これがあの高畠かと思はれるほど、別の魅力で島木の目を引きつけた」という、「枯木のある風景」の主題の伏線ともなる記述を得て、ようやく書くことができたのではないかと思われる。小出楢重の二冊の随筆集と「枯木のある風景」について言及する予定であったが、次の機会にしたい。

註（1）『生誕九十年小出楢重展』図録（一九七八年九月二日）十月一日発行、西宮市大谷記念美術館）